

各関係機関の長 様

滋賀県病害虫防除所長
(公印省略)

病害虫発生予察情報(特殊報第1号)の送付について
このことについて下記のとおり発表したので送付します。

平成14年度 病害虫発生予察特殊報 第1号

平成14年5月10日
滋 賀 県

1. 病害虫名: トマトハモグリバエ (*Liriomyza sativae* BLANCHARD)

2. 発生状況

- (1) 本種は、アメリカ大陸原産の害虫で、アフリカ、南アジア、中国などで侵入・定着が確認されている。国内では、平成11年に沖縄県で初めて侵入が確認され、現在、33都府県で発生が報告されている。
- (2) 本県では、平成13年8月から10月に県内全域で調査を行ったところ、県内各地のキュウリ、トマト等で既発生と異なるハモグリバエ類の幼虫および蛹を多数確認したので、羽化した成虫を京都府病害虫防除所に同定依頼したところ、平成14年4月26日にトマトハモグリバエであることが確認された。

3. 寄主植物

本種はマメハモグリバエと同様に、極めて多くの植物に寄生する。国内で寄生が確認された主な植物は下記のとおりである。

ウリ科 キュウリ、メロン、スイカ、カボチャ、シロウリ、マクワウリ、ヘチマ
ナス科 トマト、ナス、ピーマン、ペチュニア、テリミノイヌホオズキ
マメ科 インゲン、ソラマメ、アズキ、ダイズ、ササゲ
キク科 ゴボウ、シュンギク、マリーゴールド
アブラナ科 ハクサイ、ダイコン、カブ、キャベツ、コマツナ、ブロッコリー
アオイ科 オクラ

4. 形態

成虫は、体長約1.3~2.3mmでマメハモグリバエ、ナスハモグリバエとほぼ等しい。体色もマメハモグリバエ、ナスハモグリバエと概ね同じで、肉眼での識別は困難で、実態顕微鏡により頭部を観察する。トマトハモグリバエの頭部の外頭頂剛毛着生部の色は黒色で、マメハモグリバエ、ナスハモグリバエの同部の色は黄色である。正確な同定を行う場合は、雄成虫の生殖器挿入部の観察によらなければならない。

卵は、長径0.2~0.3mm、短径0.1~0.15mmの楕円形で、半透明のゼリー状である。

幼虫は、淡黄色のうじ状で、3齢幼虫の体長は約3mmである。

蛹は、長さ1.3~2.3mmで、黄褐色の俵状である。

5. 生態

雌成虫は産卵管で葉に穴を開け、葉肉内に卵を産み付ける。ふ化した幼虫は葉肉を食害し、葉に不規則な線状潜孔を形成する。老熟した幼虫は葉から脱出し、地表に落下し蛹化する。潜孔及び蛹化の方法は、マメハモグリバエとよく似ており、区別は困難である。

卵から成虫になるまでの期間は、気温20℃で約27日、25℃で約18日、30℃で約14日である。

6. 被害の特徴

マメハモグリバエ、ナスハモグリバエによる被害と同様に、幼虫が葉の葉肉内を食害潜行する。キュウリやトマトでは上位葉まで幼虫の潜行が認められ、寄生が著しい場合には葉が白化する。食害の様相はマメハモグリバエやナスハモグリバエとよく似ており、食害による識別は困難である。

また、これまでマメハモグリバエやナスハモグリバエでは大きな問題とならなかったウリ科作物で被害が大きい傾向がある。

7. 防除対策

- (1) トマトハモグリバエに対する登録薬剤はない。
- (2) 苗は定植前に十分調べ食害痕のあるものは定植しない。
- (3) 成虫の侵入を防ぐため、施設の出入口やサイド換気口などの開口部は寒冷紗などのネット(目合い1mm以下)を張る。
- (4) 発生ほ場では栽培終了後、後作まで20日以上何も植えずハウスを密閉し、成虫を絶食により死滅させる。
- (5) 摘葉した残渣や、収穫終了後の茎葉は次の発生源となるので、土中に埋めるか、古ビニールで被覆して死滅させるなど、適切に処分する。
- (6) 施設内部や周辺の雑草にも寄主となる作物があるので、施設内外の除草に努める。

アグリファックス滋賀

ファックスを使った農業情報サービス
病害虫発生状況・今後の予報・栽培管理などを
いつでもファックスで取り出せます。
病害虫発生予報の解説も登録されています。

0748 - 46 - 5454

滋賀県病害虫防除所

〒521-1301

滋賀県蒲生郡安土町大中516

TEL 0748-46-6160

0748-46-4926

FAX 0748-46-5559